

感想文コンクール

第25回新聞記事感想文コンクール(県NIE推進協議会主催)の産経新聞社賞に選ばれた長岡市立川口中3年、小宮山朋香さん(14)の表彰式が23日、同市西川口の同校で行われ、産経新聞社新潟支局の池田証志支局長が小宮山さんに表彰状と盾、記念品を手渡した。

小宮山さんの作品「慰霊、復興、平和」は、元米兵が昭和21(1946)年に県内で撮影した写真を基にした新聞記事で戦後の混乱期の生活を知り、戦中・戦後を前向きに生きた人たちへの感謝の気持ちを今後も持ち、平和への思いが込められた長岡花火を見ようと決心したという内容。素直で柔軟な感受性で題材をとらえ、分かりやすい文章と構成で故郷への愛を表現した点が評価された。

小宮山さんは「初めて最初から最後まで見た長岡花火の意味を調べ、思ったことをそのまま書きました。うれしいです」と話した。小宮山さんの作品の全文(原文)を紹介する。

戦後復興 感謝の思い



産経新聞社賞を受賞し、表彰される長岡市立川口中3年の小宮山朋香さん(左) 23日、同市西川口

産経新聞社賞 小宮山さん表彰

作品全文

平成30年8月15日に、平成最後の「終戦の日」を迎えた。新聞にはいくつも、戦争や終戦の日についての記事が取り上げられていた。私はその中から、新潟日報社のある新聞記事に着目した。

それは、元米兵の方が戦後間もない1946年に新潟県で撮影した写真約100枚を新潟日報社に提供した。という記事だ。新聞の表紙には、まだ空襲の焼け跡が残り、積み上げられた材木などが見て取れる、長岡市の中心市街地の白黒写真が載せられていた。中にある記事も見てみるとカメラの前に集まってきた坊主の子どもたちや七夕祭りの写真、

ゴム跳びをして遊ぶ子どもたちの写真など8つの白黒写真が載せられていた。終戦から間もないだけに栄養状態が悪いため頬がこけている子どももいたようだ。だが、笑顔の子どもたちの表情や祭りの山車に書かれた「明るい日本は僕等の腕で」という文など、戦後の混乱期を前向きに生きる人々の営みが写真から感じとることができた。

私は、今年長岡花火を近くから見ることができた。そして、その花火にはある思いが込められている。それは、空襲によって亡くなってしまった方々への慰霊の思い、それから復興に尽力した先人への感謝の思い、そして平和へのいのりだ。この思いは、特に最後に打ち上げ

られる「正三尺玉3連発」に込められているようだ。この長岡花火には、70年もの歴史がある。長岡花火に込められた強い想いは、70年経ても変わることなく私たちの中にもすっかり受け継がれていることだろう。

私は、あの新聞記事を見て、戦時中や戦後を前向きに生き、今の日本をつくるための大きな支えになったであろう人々に感謝して生きたいと思った。また、その人々の様子を写真に収めてくれた元米兵のジェームズ・イングリッシュさんにもとても感謝したい。そして、長岡花火を見るときには今まで以上に慰霊や復興、平和、感謝の思いを胸に見た